

埋文群馬

MAIBUNGUNMA



埋文群馬No.61 目次

● 最新レポート

下湯原遺跡 一天明泥流下から発見された江戸時代の河原湯村ー
中沢 悟…… 2

金井下新田遺跡 ー古墳時代地域首長の拠点遺構を調査ー
調査部…… 4

金井東裏遺跡出土品の詳細調査
大木紳一郎…… 5

● いま、地域が見えてくる

日輪寺観音前遺跡 ー数々の洪水により、地下3mに埋もれていた平安時代の遺跡ー
関根慎二…… 6

新井遺跡 ー解明が進む榛名山北西麓の歴史ー
松村和男・立野喜紀…… 8

久々戸遺跡 一天明泥流下の畑跡下に眠っていた縄文時代の敷石住居ー
関 俊明・小林茂夫…… 9

● 整理最前線

林中原Ⅱ遺跡 ー縄文時代中期～後期の環状集落ー
山口逸弘……10

月夜野古窯跡群深沢B支群 ー北毛地域の古代窯跡ー
神谷佳明……10

● 体験学習

野焼き体験 ー縄文土器をつくる・焼くー
一場茂樹……11

掲示板・表紙の写真解説



しもゆばら 『下湯原遺跡』(吾妻郡長野原町川原湯)

天明泥流下から発見された江戸時代の河原湯村

専門調査役 中沢 悟

1 はじめに

下湯原遺跡は吾妻川の右岸、JR吾妻線の旧『川原湯温泉駅』周辺にあって(表紙写真)、江戸時代の吾妻郡河原湯村の東端にあたります。河原湯村の集落や田畑の多くは、天明3年(1783)の浅間山噴火に伴う泥流で埋没しました。当時原町の名主だった富沢久兵衛が記した『浅間記』には、河原湯村の泥流被害は「拾九軒流失 十四人死」とあります。調査区からはほぼ全面にわたり畑が確認されましたが、確認された建物跡は1軒だけでした。流失した集落は他の場所と思われる。今回発見された他の遺構は、江戸時代の道路、礎石建物、掘立柱建物、墓等、平安時代の住居や縄文時代の土坑等です。

2 江戸時代の2面の畑

発掘調査対象区域は60,000㎡を超え、浅間山噴火に伴う泥流で埋もれた畑がほぼ全面で確認できました。このような畑は、長野原町尾坂遺跡・下田遺跡・石川原遺跡や、東吾妻町上郷岡原遺跡等、吾妻川沿いの各遺跡で発見され、広域にわたる大規模耕作が明らかとなってきました。ただし、いつ頃から大規模経営となったのか、それ以前の畑はどのような形態であったのかについて詳しいことは分かっていません。

今回の下湯原遺跡の発掘調査では、天明3年泥流埋没畑の下層からも畑を検出しました。泥流埋没畑の畝幅が30～50cmであるのに対して、下の



写真1 発見された上下2面の畑跡

畑の畝幅は60～75cmと広く、さらに畝方向も異なるので、栽培されていた作物が異なるものと思われます。下の畑からは、18世紀前半頃の九州肥前の焼物が出土しているので、50年ほど前の時代の畑と考えられます(写真1)。

3 その他の江戸時代の遺構

(1) 道路

畑跡の南で、山裾付近からは、幅1.5m前後の道路跡が見つかりました。路面には天明3年の浅間山噴火に伴う軽石が積もっており、当時に使われていた道路であることが分かります。この道路を吾妻川上流方向の西に進めば旧横壁村、東に行けば旧岩下村につながっていたと思われます(写真2)。



写真2 山裾を通る道路跡

(2) 礎石建物跡

天明3年の泥流によって埋没した礎石を持つ建物跡が1軒ありました。建物内に軽石は無く被災前は屋根がかかっていました。建物の敷地面積は18坪(約60㎡)で、建坪が6坪(東西2間×南北3間。約20㎡)でした。建物内部には簡単な囲炉裏がありましたが、生活用具である陶磁器の皿や碗等の出土はありませんでした。建物北側の石列の外に2個の桶が埋まっていた。桶は腐敗していましたが桶の明瞭な痕跡を残していましたが桶の直径は1.1m、深さは80cmあり、対岸の東宮遺跡の厠桶より大きいものでした。桶を囲むように掘られていた柱穴の存在や柱穴の外にある溝中の軽

石の存在から、礎石建物から延びた屋根が掛けられていたことがわかります。

この礎石建物跡は、平成26年度に調査した、吾妻川対岸の東宮遺跡で検出した8軒の建物に比べると非常に小さなものです。東宮遺跡では敷地面積が約100坪、建坪が約25坪前後の主屋と厠や物置等からできています。下湯原遺跡で発見された小さな建物は、畑の管理等を目的とした建物でしょうか。



写真3 礎石建物跡（画面左が北）

(3) 墓地と礎石建物（お堂）

遺跡中央に山寄りの斜面をひな壇状に削り平坦面を造成して造った墓地がありました。削平面には石垣が積まれおり、遠くから見ると石垣で囲われている大きな墓地が良くわかります。平坦面の規模は東西16m、南北10m、石垣の高さは約1.5mでした。人骨を伴う25基の墓坑がこの平坦面を中心に、平坦面の南側斜面や北側石垣の下等に掘られていました。墓坑から出土した人骨の残存状況、銭や陶磁器等から、これらの墓坑は中世末から近世の前半であることがわかります。

墓地からは5基の墓石と五輪塔、宝篋印塔、宝ほうきょういんとう



写真4 墓地の調査風景

塔、石殿等の石造物が多量に出土しています(写真6)。それらの分布や土層観察から墓地は数回の改築工事が行われていたこともわかりました。墓地内の東側にお堂と考えられる建物が2棟建てられていました。2棟は重なっており、新旧関係があります。上の新しい建物は、礎石建物で規模は3間×3間(東西4.55m南北3.64m)下の建物は掘立柱建物で2間×2間(東西4.5m南北3.48m)でいずれも東西方向に長い建物です。

2棟とも西側に広い空き地があり、入口は西にあったと考えられます。なお、焼土と炭が礎石を持つ新しい建物周辺に残っているので、この建物は焼失したものと思われ、それらは撤去されていないので、建物は再建されなかったと思われま。その後泥流に埋まった段階で墓地は放棄され、再び使われることはなかったようです(写真5)。

これまでの、ハッ場ダム建設工事に伴って発掘調査してきた泥流に埋もれた天明3年の遺跡から得られる情報から、文献資料だけでは解明できない当時の人々の暮らしぶりが目に浮かんできます。



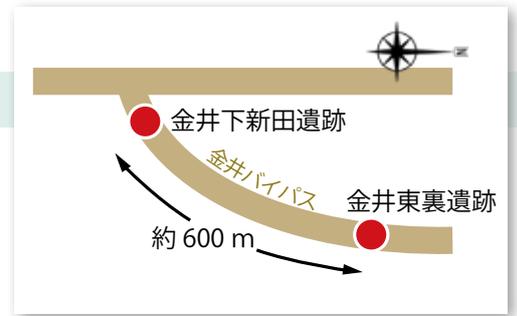
写真5 お堂と考えられる礎石建物（西から）



写真6 墓地から出土した石殿と宝塔

『金井下新田遺跡』(渋川市金井)

古墳時代地域首長の拠点遺構を調査



調査部

「甲を着た古墳人」が発見された金井東裏遺跡の南に隣接する金井下新田遺跡5区で、平成26年度に確認された囲い状遺構の西側の調査を進めたところ、囲い状遺構とその周辺遺構の様相が明らかになってきました。

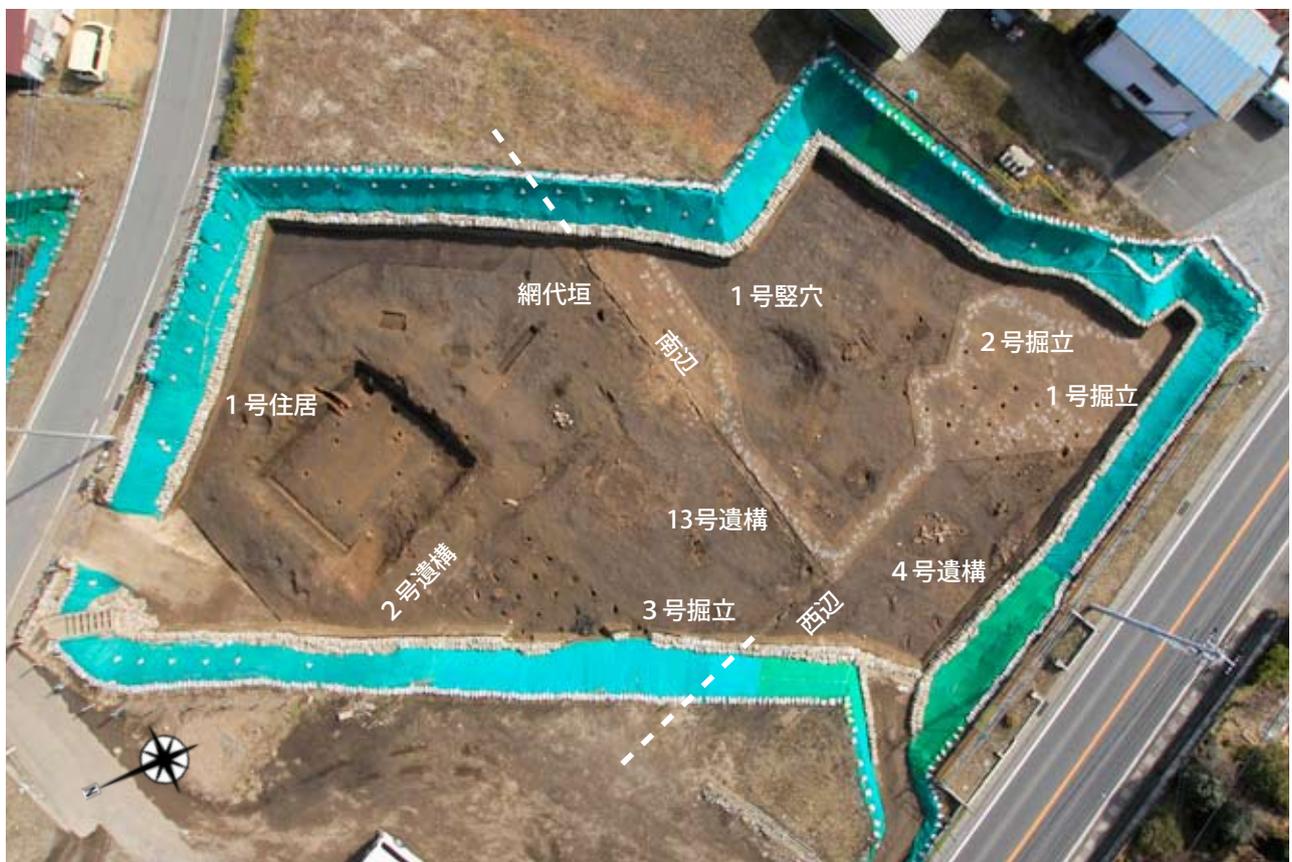
囲い状遺構は、東西約55m、南北約48mと推定される方形の区画を、網代垣で囲むものです。今年度の調査により、網代垣は、1.8m間隔に立てた角柱に、植物の茎をよしず状に編んだものを網代で両側から挟んで取り付けた構造で、厚さが30cm前後の堅牢なものであることがわかりました。さらに、高さは最大で3m前後となることも確認されました。

囲い状遺構の内部は低い垣で東西に区画され(2号遺構)、その東側には大型竪穴建物(1号住居)と小型の竪穴建物(4区1号竪穴)が、西側には3間×5間の総柱の掘立柱建物(3号掘立)とその南側

に直径約3mの円形遺構(13号遺構)が整然と配置されていました。これらの建物にはいずれも屋根材がすでになく、抜き取られた柱もありました。

囲い状遺構の南側には、2棟の掘立柱建物(1号・2号掘立)、小型の竪穴建物(1号竪穴)、須恵器の高杯形器台という特殊な土器や多量の石製模造品が残された複数の祭祀遺構(4号遺構など)が密集していました。

囲い状遺構とその周辺は、施設の規模や構造から古墳時代の地域首長の政治拠点と考えられます。このような遺構が火山噴火で被災した状態で発見されたのは国内で初めてのことで、火山灰下の残存状況からみると建物は火山災害以前に廃絶、もしくは解体途中であった可能性もあります。「甲を着た古墳人」との関係を含め、古墳社会の実像を明らかにするための貴重な調査となりました。



上空から見た金井下新田遺跡5区 / Hr-FA 下面 (平成28年2月撮影 / 小さな白丸は馬蹄痕)

『金井東裏遺跡出土品の詳細調査』（澁川市金井）

これまで骨製としていた小札は鹿角製と判明

専門調査役 大木紳一郎

金井東裏遺跡で、衝撃的な「甲を着た古墳人」が発見されてから早3年余りが過ぎ、この間、4体の人骨のほか、貴重な古墳時代の出土品について、詳細な観察と科学的分析研究を進めてきました。

それらの中でも、日本初の発見となり、これまで骨製小札としていたものが、平成27年度詳細調査でニホンジカの鹿角製であることが判明しました。極めつけの稀少品といえます。「小札」とは、長方形に近い薄板で、これをいくつも重ねて綴じ合わせることで甲が作られます。甲は身体を防護するための武具として、古墳時代以降に丈夫な鉄製品が普及しましたが、古墳時代の甲の小札で鹿角製品のものはいまだに知られていませんでした。「甲を着た古墳人」のすぐ近くで、カタツムリのように巻かれて発見された2号甲の解体作業中に、鹿角製小札が姿を現したのです(写真1)。



写真1 巻かれた状態で見つかった鹿角製小札

【小札の形】

鹿角製小札1枚の形は、上部が少し丸い長方形をしています。平均的な大きさは長さ6.5cm、幅2.7cm、厚さは5mmでした。小札をつなぎ合わせるひもを通すための穴が11個あけられていました。この穴の配置(上部から順に2個、2個、2個、3個)は、一緒に出土している鉄製小札と同じことになっています(写真2)。

鹿角製小札1枚の大きさから判断すると、ニホンジカの角の幹の一番太くまっすぐな部分を使ったとしか考えられません。さらに、大きな角が入

手できたとしても、1本につき多くて4枚しか小札の素材は取れなかったのではないかと思います。



写真2 鹿角製小札

【鹿角製小札の復原】

鹿角製小札の発見当初は45枚で3段構成と考えていましたが、その後の調査で、50枚の4段構成であることが分かりました。その全体形は、一番上の段に左右2枚ずつの小札が突き出た「エプロン形」だったと推測しています。全体を広げると、幅25cm前後、高さ16～18cmほどの大きさに復原することができました(図1)。

推定復原した形や大きさから、鹿角製小札をつなぎ合わせた部品は胸の上部を防護する「胸当て」の可能性が高く、また弓を引くときの防具となる「脇当て」とも考えられます。ただし、鉄製の甲冑と組み合わせると、この部分だけ鹿角製だったことを考えれば、実用品というより装飾的・威信の意味合いが強かったのではないのでしょうか。

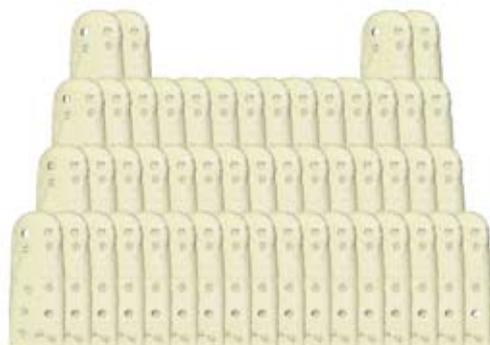


図1 鹿角製小札の推定復原図

いま、地域が見えてくる

にちりんじかんのんまえ 『日輪寺観音前遺跡』 (前橋市日輪寺町)

数々の洪水により、地下3mに埋もれていた平安時代の遺跡

資料2 課長 関根慎二

前橋市の北西部にある日輪寺観音前遺跡は、町名の由来となった日輪寺の東から南にあって、県道南新井前橋線建設に伴って発掘調査が行われました。本遺跡は、西を流れる利根川支流の桃ノ木川と、これに合流する東の大堰川おおいとに挟まれた標高124m前後の台地部に立地しています。調査区内には、昭和22年(1947)のカスリーン台風の洪水による土砂が1.5mほど堆積し、調査面が現地表から3m近く深くなった場所もありました。

遺跡からは江戸時代及び平安時代の遺構が発見されました。大堰川の対岸や、大堰川と桃ノ木川に挟まれた周辺でも、平安時代の遺跡が発見されていることから、本遺跡周辺の地域は、古代の集落を営む条件の良い地域だったといえます。

その中から主な成果を紹介します。

【江戸時代】江戸時代の遺構は、大堰川や桃ノ木川が氾濫した洪水層の土に覆われていました。

1 広大な屋敷

屋敷を囲む溝の長さは南北約40m、東西43m以上の規模で方形にめぐっていたと考えられ、南西部のコーナーが調査区内で発見されました。

屋敷から出土した陶磁器や石臼などの年代から江戸時代の溝であることがわかりました(写真1)。



写真1 近世の屋敷を区画する溝(南西から)
(周りの四角形の凹みは平安時代の竪穴住居跡)

屋敷内からは、小さい礫を敷き詰めた上に大きく扁平な土台石を据え置き、周りに固定するための石を並べた遺構が発見されたことから、礎石を



写真2 江戸時代の建物の礎石

持つ建物が建っていたと考えられます(写真2)。

同じく屋敷内で発見された墓は、長さ2.7m、幅1.2m、深さ0.5mの長楕円形で、墓穴の底面には扁平な川原石を敷き詰めていました。墓の中か



写真3 江戸時代の墓と副葬品



写真4 江戸時代の畑

らは、葬られていた人が使った食器なのでしょう
か、陶磁器の皿が置かれていました(写真3)。

2 畑と農作物貯蔵用の土坑

屋敷の外側周辺は、畑地になっていました。畑
の畝の低い部分が溝状に見つかり、畑と畑の間の
区画に、長方形の農作物貯蔵穴が畝と直交する方
向に掘られていました。

これらの調査から、当時の溝で区画された屋敷
の中と外との土地利用状況の違いがわかります。

【平安時代】調査区の中央部には南北方向に延
びる幅3m、深さ1.5m程の河道があり、この河道
を挟んで東西にそれぞれ9世紀から10世紀の竪穴
住居・掘立柱建物・畠・貯蔵用の土坑・溝などを検出
しました。

1 竪穴住居群

竪穴住居59軒、掘立柱建物4棟を発見し、住居
を検出した地層と同じ面で、住居の間の位置に、
畠や土地を区画する溝等があることもわかりまし
た。大堰川周辺には、これまでの発掘調査で当時
の水田があることが判明しており、当時の人たちは、
家の周りに畠を作り、水田は水の便がよい所に
作る等の土地利用の状況が分かります。

竪穴住居の中には、火災にあったのか、それと
も家を廃棄するときに燃やしたものなのか判然と
はしませんが、柱や屋根の材料が炭になって床面
から大量に発見されたものがありました。炭に混
じって、土器の破片が出土しています(写真5)。



写真5 大量の炭を伴う平安時代の竪穴住居

2 二重の堀で囲まれた屋敷

日輪寺の西に隣接する菅原神社前の調査区で
は、幅1m、深さ1m程の堀が二重に巡っていま
した。内側の堀は南西隅で北側に曲がり、菅原神
社の方に延びることが確認されました。堀を埋め

る地層の年代や9世紀の土器が出土していること
から、平安時代前半の屋敷を区画する堀と考えら
れます。区画内からは、建物跡は発見されませ
んでしたが、堀の中心部が調査区の北側にあるた
め、調査区外に建物があった可能性が考えられま
す。外側の堀の一部は掘り残してあり、屋敷の内
外を結ぶ通路である「土橋」となっていました(写
真6)。



写真6 平安時代の二重の堀



写真7 平安時代の鍛冶遺構 (中央の大きな石が台石)

堀が完全に埋没した時期に、鍛冶遺構が作られ
ています。ここからは、鉄を赤熱させる炉の部分
に炭や焼土があり、炉の近くには大きな台石が据
え置かれていました。台石の表面は平らで、鉄を
叩いた時に出来る小さな傷が残っていました。さら
に、ふいごの羽口や、製品を研ぐための砥石など
とともに、鉄を鍛えるときに出来る鍛造剥片や粒状
滓が発見されました。

周辺の遺跡でも鍛冶遺構が確認されていること
から、この地域には製鉄に関わる集団がいたこと
が推測できます。平安時代の鍛冶について貴重な
資料となるでしょう。今後の研究が待たれます。

『新井遺跡』(吾妻郡東吾妻町厚田)

解明が進む榛名山北西麓の歴史

主任調査研究員 松村和男・調査研究員 立野喜紀

上信自動車道吾妻西バイパス建設に伴って発掘調査した新井遺跡は、吾妻川右岸の段丘上、標高約410m前後のところに立地しています。『埋文群馬』第59号掲載の四戸遺跡とは吾妻川支流の温川を挟んで東側になります。調査区は西から東へA・B・C区と3区画に分け発掘調査を行いました。平成27年度の主な調査成果について紹介します。

1【平安時代～中近世の粘土採掘坑】

B区の台地縁辺で、粘土採掘坑群が見つかりました。採掘坑の大きいものは長径5m、深さ1mあり、出土した土器の年代により、平安時代から中近世頃まで、長期にわたり粘土採掘をしていたようです(写真1)。ここから良質の粘土が採れることが地域の中で重要な情報として代々伝え続けられていたと思われます。

前出の四戸遺跡の古墳時代住居跡のカマドに使用されていた灰白色粘土の地層は、これまで周辺地区で発見されずにいました。しかし、新井遺跡の採掘坑から灰白色粘土層が確認できたことから、粘土採掘は古墳時代まで遡る可能性も出てきました。



写真1 平安時代～中近世の粘土採掘坑(西南から)

2【古墳時代の石製模造品】

C区古墳時代住居跡から祭祀用具の滑石製模造品5個が、1カ所にまとまって出土しました。剣形と有孔円板の他、珍しい形の模造品が3点ありました。縦長の台形で上幅2cm、下幅3.5cm、長さ3.5～4.6cm、上下に一つずつ計2個の孔が穿けられています。何を模したもののなのか、今後解明を進めます(写真2)。

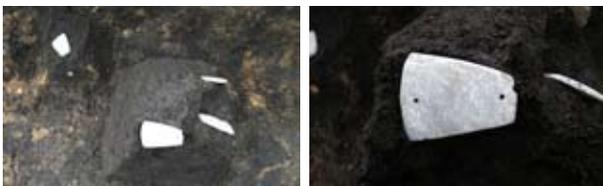


写真2 滑石製模造品出土状況(東から)

3【弥生時代の鉄剣】

C区で弥生時代の墓と考えられる一辺1.5～2.0m、深さ0.2～0.6mの方形の土坑を6基検出し、この内第4号土坑中央部の床面からは、切っ先を北東に向けて置かれた一振りの鉄剣が出土しました(写真3)。剣の長さは28cmで、先端部が欠けていました。観察の結果、埋める以前にすでに欠けていたようです。その剣先はいったいどこにいったのでしょうか。もしも、戦に使用したのならば、その時に欠けてしまったのか。1本の鉄剣から、吾妻川流域の弥生時代像について様々な想像を巡らしています。



写真3 第4号土坑(南から)と鉄剣出土状況(北から)

4【縄文時代の柄鏡形敷石住居跡】

縄文時代の遺構はすべてC区で見つかり、竪穴住居跡15棟を検出しましたが、集落が形成されたのは前期と、中期末～後期の2時期であることが分かりました。この内、中期末～後期の柄鏡形敷石住居跡は4.8×3.7mの隅丸長方形の住居部の東に2.5×1.7mの出入口部が付設するものです(写真4)。住居部の周溝に小石を詰めており、周溝の四隅と中間に合計8箇所の支柱穴がありました。検出された敷石住居跡はこの1軒のみでした。

新井遺跡の発掘調査は継続します。平成28年度は東側隣接地の発掘調査が予定されています。どのような遺構が発見されるか楽しみです。



写真4 縄文時代中期末～後期の敷石住居跡(東から)

『くぐど 久々戸遺跡』 (吾妻郡長野原町長野原)

天明泥流下の畑跡下に眠っていた縄文時代の敷石住居

主任調査研究員 関 俊明・主任調査研究員 小林茂夫

吾妻川の右岸にある久々戸遺跡は、JR吾妻線長野原草津口駅のちょうど対岸にあたります。これまで平成7、9～11、15年度に発掘調査されています。平成27年度の調査区は遺跡の中央部にあって、2mほどの自然地形の段差で南の上段部と、北の下段部に分けることができます。川面からの高さは約30m、遺跡の北を流れる吾妻川の方向に傾斜する地形でした。調査区の全面は天明3年(1783)の浅間山噴火で発生した泥流層が2mほどの厚さで覆い、その下に1～2cmの厚さの軽石層が畝やサクに沿って堆積していました。これが第1の調査面で、江戸時代後期の畑跡が残っていました(写真1)。



写真1 天明泥流下面の合成全景写真(画面上が南で、画面下が吾妻川が西から東へ流れる。)

第1面から50～100cm下の第2面の調査では、時期不明の陥し穴、縄文土器や弥生土器が出土した土坑等を調査しましたが、中でも注目される柄鏡形敷石住居跡について紹介します。

敷石住居跡は、上段の縁辺にあり、掘り込みの深さが50cmほどの極めて残りの良い住居跡です。上段部ではこの1棟だけしか見つかりませんでした。住居部の大きさは概ね2.0×1.8mで、床面には板状の石が敷き詰められ、敷石面の外周には縁取るように小振りの円礫などが敷かれていました。石敷きは住居部の北に接続する出入口部でも認められたので全面敷石といえます。住居部床面中央には約60×60cmの方形の石囲炉を備え、また、出入口部と住居部の境には40×20cmの長方形の石囲い施設もありました。また、住居部からは配置良く5カ所で支柱穴を検出しました。

床面からは、遺跡周辺では産出しない点紋緑泥片岩製の長さ80cm、重さ20kg以上もある石棒が1点と複数

の磨かれた丸石が、置かれたような状態で発見されました。石棒は当時の祭祀儀礼に関わるもので、この特別な石材で作られた大型石棒は、縄文人の手で峠を越え遠方から運び込まれ、吾妻川のほとりの敷石住居の中に置かれたのです。

石囲炉付近から出土した土器は縄文時代中期の終わり頃のもので、このことから全面に石を敷きつめた敷石住居としては初期のものと考えられます(写真2、3)。



写真2 第2面全景(東から)黄色○印が敷石住居跡検出位置



写真3 敷石住居跡全景(北から)

縄文時代のシンボリックな住居の存在から、縄文人たちの精神世界をのぞいてみたくになります。出入口部の東側の自然の巨岩は、縄文人も動かすことができなかったのでしょうか。敷石住居の一部として構成されていたと考えられますが、天明3年時点では畑の中で頭をのぞかせていました。当時の地面から80cmほど下がった位置が敷石住居の床面だったわけです。耕作の及んだ部分までは、鍬などによりつけられたと思われる傷が、この巨岩の表面にたくさん残っていました。江戸時代の人たちは、畑の下にこの敷石住居が眠っていたとは知らずに耕作していたのです。そんな想像をしていると、思わず約4,000年～230年前の間の時間の流れを独り占めしたかのように感じることができます。

『林中原Ⅱ遺跡』

縄文時代中期～後期の環状集落

(吾妻郡長野原町長野原)

林中原Ⅱ遺跡はハッ場ダム建設に伴って実施されたハッ場バイパスと町道建設に先立ち、平成20～21年度に発掘調査をしました。台地の上に多数の住居や土坑からなる縄文時代集落が発見され、特に焼けた人骨(焼骨)が出土した土坑が話題を呼びました。整理作業は平成25年度から始めていますが、このほど刊行する第1分冊では、ハッ場バイパス地区で発見された縄文時代中期(約5000年前)の住居や土坑、後期(約4000年前)の敷石住居や墓壇を報告しました。

整理作業の結果、焼骨を出土した土坑は、縄文時代中期後葉の前半のものであることが解りました。林中原Ⅱ遺跡で住居が増え始めた時期にあたり、台地を取り巻くように住居が環状に配置されていたようです。焼骨出土の土坑は、住居群から距離を置いて、環状配置の中央部に設けられており、集落の中央で焼骨を伴う屋外の儀礼が行われていたことが判明しました。

次の縄文時代中期後葉の後半になると、焼骨を出土

ハッ場ダム調査事務所 資料課長 山口逸弘

する土坑は無くなり、かわって住居内に埋葬や伏葬、立石などが設けられます。縄文時代中期後葉の時期に、屋外儀礼から屋内儀礼への変化を見ることができました。

林中原Ⅱ遺跡の整理は、平成28年度も町道部分を中心に行う予定です。縄文時代中期～後期の集落内の動きや周辺地域との交渉の様子、当時の儀礼の数々が明らかになるでしょう。ご期待下さい。



51区17号住居出土土器(縄文時代中期後葉)

『月夜野古窯跡群深沢B支群』

北毛地域の古代窯跡

(利根郡みなかみ町月夜野)

古代利根郡を中心に須恵器を供給した月夜野古窯跡群の一支群を構成する深沢B支群は大峰山の東山麓、利根川上流の右岸に立地します。平成26年度に一般県道月夜野猿ヶ京温泉線の道路改築工事に伴い発掘調査を行いました。

古代上野国は、関東では比較的早く6世紀前後には須恵器生産が導入された地域です。生産地としては太田市金山古窯跡群、藤岡市藤岡古窯跡群、高崎市観音山乗附古窯跡群、吉井古窯跡群、安中市秋間古窯跡群、桐生市桐生古窯跡群、伊勢崎市舞台遺跡、前橋市樋越遺跡群八ヶ峰と月夜野古窯跡群が知られています。

月夜野古窯跡群は8世紀前後の時期に開窯されたことが、みなかみ町村主遺跡の竪穴住居から出土した須恵器からわかっています。しかし、山間地に存在するため、詳しいことは解明されていませんでした。わずかに、深沢B支群の南に位置する洞A支群で須恵器窯3基、沢入A支群で窯跡に伴う灰原が発掘されているのですが、分布調査などによって須磨野A支群、真沢A支群、水沼A支群が発見されるとともに、洞Ⅲ遺跡や藪田遺跡・藪田東遺跡では工人集落、粘土採掘坑などが発掘調査されたほどでした。

今回の深沢B支群の発掘調査では、平安時代の須恵

専門調査役 神谷佳明

器窯6基を検出しました。その内2基は比較的良好な状態でしたが、2基は攪乱や木の根によって窯体の一部が残存するだけで、残り2基も窯体本体ではなく窯に伴う灰原でした。残りの良好な2号窯跡では、底面の状態から2回の操業を確認することができました。また、窯体内部や灰原から出土した須恵器の多くは杯や椀などの食膳具で、大型の鉢や甕、羽釜などの貯蔵具や煮沸具を少量含むことがわかりました。この他に5号窯跡灰原から出土した北陸系の土師器ロクロ甕は、北陸地方との交流を示唆するものとして注目されます。さらに、須恵器の年代は概ね9世紀後半代に位置づけられることから、月夜野古窯跡群の中では、洞A支群に続く時期に操業がされたことが判明し、この地区の窯業操業期間に関して新たな知見を得ることができました。



2号窯跡

『野焼き体験 縄文土器をつくる・焼く』

普及啓発嘱託員 一場茂樹

平成27年度の「縄文土器をつくる・焼く(野焼き体験)」が今年度は埼玉県からの参加者もあり、募集定員を上回る12名の希望者が集まりました。

10月1日の初日は、関根慎二資料2課長による「縄文土器の話」と題する講話から始まりました。この中で、関根課長は、1万年以上に及ぶ縄文時代を六時期に大別し、それぞれの時期における土器の特色や文様が持つ意味、地域性等についてわかりやすく説明した後、収蔵展示室の縄文土器の実物を示しながら、それぞれの土器の特徴について詳しく説明しました。参加者は熱心に耳を傾けると共に細かい点まで積極的に質問し、充実した導入講話となりました。午後は、初めて参加された方は、まず、自分がどんな土器が作りたいか、土器の選定に取り組みました。また、早速、体験学習室で土器づくりを始める参加者もいました。今回使用した粘土はテラコッタ粘土ですが、参加者の多くは、砂を2～3割ほど混ぜた粘土を使用しました。

この後、1か月をかけて、各自が選んだ縄文土器の制作をしました。制作にあたっては、参加者各自の制作経験や制作技術に関する情報を交換し合いながら、自身の作品の完成に向けて地道な作業を続けました。

11月の1ヶ月をかけて乾燥させた土器を12月6日に埋蔵文化財調査事業団の中庭の野焼き専用スペースで野焼きしました。当日は、参加者10名と事業団職員も6名が参加しました。

午前9時に新倉明彦普及課長が、土器の焼成に関して専門的な説明をした後、野焼きの手順の説明と危険防止に関する注意事項を確認し、実習に取り組みました。

野焼きの最初は、地面の水気を除去するための下焼きを1時間ほど行い、十分に乾燥したところで、一旦火を片付け、土器を中央部に置きます(写真1)。その後、土器から離れた位置から火を焚き、徐々に火を強め、土器に近づけながら温度を上げていきます。そして、

1時間半ほど経過し、土器の温度が十分に上がったところで、薪の投入量を増やし、火力を強めます。当日は、時折、強い風が吹き、一気に火勢が強まり炎の迫力を感じ、土器の焼成が進んでいるという実感がありました。最後にもう一段と燃料材を大量に投入し、再度火力を強め、焼き上げます(写真2)。

(写真2)



その後、1時間程で炎が納まったところで、中央の炭火を周辺に片付け、土器を冷却し、野焼きの完成です。今回の野焼きでは、一部の土器にひびが入ったものの大きな破損は一点もなく、参加者の皆さんも自分の作品の仕上がり具合に満足された様子でした。また、今まで野焼きを経験された参加者の中から、「今回のような焼き方は初めてで、燃料の節約にもなり、大変勉強になった。」という感想もいただきました。

そして、最後に参加者全員で各自の完成作品を持った記念写真を撮影し(写真3)、午後2時すぎ、約5時間の野焼き体験が無事終了しました。



(写真1)



(写真3)

掲示板

普及課からのお知らせ

1 金井東裏遺跡出土の2号甲鹿角製小札のレプリカ展示を始めました。

本誌5ページで紹介しました金井東裏遺跡2号甲の鹿角製小札のレプリカが、このほど群馬県教育委員会により製作されました。

下記により展示しておりますので、わが国唯一の鹿角製小札を連ねた甲を見学してください。

■場 所 群馬県埋蔵文化財調査センター 発掘情報館 2階 資料展示室

■開館日及び開館時間 日曜日から金曜日の午前9時～午後5時
(午後4時30分までに入館してください。)

■休館日 土曜日、祝日、年末年始、年度末年度始の定める日
(祝日と日曜日が重なる日は開館し、翌日休館です)

■入館料 無料です。

■参加費 無料です。

■予 約 必要ありません。

2 電子メールにより行事案内をお知らせしています。

■当事業団では、年間を通じて展示会や講演会などを催しています。電子メールによるこれらの案内を希望される方は、下記のアドレスより申込みをしてください。

なお、受付時の事務処理上、事業団へ送信していただく電子メールのタイトルは「行事案内希望」とし、本文に郵便番号、住所、氏名、連絡先電話番号を記入してください。



■電子メール送付先

gunmaifukyu@apricot.ocn.ne.jp



※携帯電話アドレスへの連絡を希望される方は、パソコンからのメールが受信できるように携帯電話の設定をしてください。

■事業団のホームページ

<http://www.gunmaibun.org/>

連絡先: 普及課
☎0279-52-2513



表紙解説

発掘調査中の下湯原遺跡遠景と調査風景

下湯原遺跡はJR吾妻線の旧「川原湯温泉駅」周辺部に広がる遺跡です。写真左を吾妻川が写真奥に向かって流れ下っています。中央の「コ」の形をしたものは旧「川原湯温泉駅」のホームをつないでいた跨線橋です。遺跡のほぼ全域から、天明3年(1783)の浅間山大噴火に伴う泥流で埋もれた畑跡が発見されました(遺跡の西に架かる八ッ場大橋から撮影)。

左下の写真は天明泥流直下の畑の調査風景です。畝間の走向の違いから畑の境がわかります。短冊状の細長い畑でした。(東から撮影。八ッ場大橋の橋脚の間に遠く「丸岩」が見えます。)



本誌は、一般向けの埋蔵文化財情報誌です。
お問い合わせは、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団普及課までお願いします。

「埋文群馬」No.61
平成28年3月31日発行
編集・発行 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377-8555 渋川市北橘町下箱田784-2
☎0279-52-2513
印刷 上毎印刷工業株式会社